

21日に市内の小学校を訪問し、校長先生にWAM助成事業による「訪問型家族支援」について説明し、連携をお願いに行きました。

面談の冒頭で校長先生から「このような訪問支援があることは、家族にとって大きな支えになります。ぜひ連携したいと思います」との言葉をいただき、学校として助成事業の必要性をどのように受け止めているのか、を直接知ることができました。

教育者としての姿勢や価値観は、これまでの経験や歩んできた個人史によって大きく異なります。

今日の校長先生は、不登校児童とその家族が抱える課題を深く理解し、学校では対応しきれない部分に外部支援の必要性を強く感じておられました。

そのため、看護師による早期訪問支援の意義を素早く理解してくださり、「困っている保護者に対して、学校から選択肢として紹介したい」と明確におっしゃっていました。

学校という「サンクチュアリ」には独自の風土があり、外部機関との連携に消極的な中で、校長の裁量に委ねられているという現状があります。

前例踏襲を重視する文化の中で、外部との連携に積極的な校長先生に出会えることは、民間支援機関として大きな励みになりますし、支援の実効性を確認する機会にもなります。

今回の訪問では、学校と民間が対等に意見交換でき、閉ざされたがちな壁に小さな風穴を開けるような前向きな意見交換の場となりました。

このような連携によって、家族・子ども・学校・当法人のすべてが「双赢」の関係を築くことができ、社会的課題の解決に寄与できることを実感しました。

また、学校からの紹介によって訪問支援の依頼が増えることは、独立行政法人福祉医療機構による次年度の助成事業の継続にもつながります。

市教委から各学校へ周知していただければ、保護者への紹介も進み、必要とする家庭に支援が届く件数も自然と増えていきます。

そのためにも、現在、市内の学校を一校ずつ訪問し、校長・教頭先生と直接面談することで、この助成事業が不登校支援において、必要性と最適性を持ち合わせた支援であることを理解していただくことに努めているところです。

訪問支援の依頼を各学校から積極的に保護者に紹介していただき、当法人に問合せがあることが、助成期間を1年で終わる事業でなく、2年間の助成事業を成立させるために不可欠な要件であると考えています。

今後も継続して学校との連携を深め、必要な家庭に早期に支援が届けられる体制づくりに取り組んでいく予定です。